

# 『蒼頡篇』の内容と構造

——阜陽漢簡『蒼頡篇』を中心として——

福田哲之

## 序言

一九七七年、安徽省阜陽縣雙古堆一號漢墓出土の竹簡より検出された、阜陽漢簡『蒼頡篇』一二五點は、<sup>1)</sup> 墓葬との関連から、秦滅亡後僅かに四十二年を経た、紀元前一六五年以前の書寫であることが明らかにされており、避諱・語法等から、秦代『蒼頡篇』に依據した漢初の書寫本と推定されている。また、資料數の面では、それまで知られていた熒熒・居延漢簡『蒼頡篇』に三倍する五四〇餘字の判讀字數を有し、他の「爰歷」「博學」二篇を包攝する可能性も指摘されている。<sup>2)</sup>

即ち、阜陽漢簡『蒼頡篇』は、原本との關係、資料數という二つの観点から、最も好條件を兼備した資料と言うことができ、その検討は、『蒼頡篇』の全貌を窺う上に重要な手懸りを提供するものと考えられるのである。

筆者は先に、『漢書』藝文志、『說文解字』敍を中心とする傳世文獻資料に記された『蒼頡篇』に關わる記録を検討し、『蒼頡篇』が、始皇帝の文字統一の具體資料であると同時に、東漢の訓詁學の萌芽期を形成する西漢の小學や『說文解字』以前の中國字書史等を解明する上にも、極めて重要な意義を有していることを論述した。<sup>3)</sup>

小論は、傳世文獻資料に見出されるこうした『蒼頡篇』の多様な意義を、具體的に考察するための第一段階として、出土文獻資料である阜陽漢簡『蒼頡篇』を中心とし、『蒼頡篇』の内容と構造とに就いて検討を加えようとするものである。<sup>4)</sup>

阜陽漢簡『蒼頡篇』の検討にあたっては、簡牘資料という性格上、多くの制約が存している。そこで、まず初めに、簡牘資料の性格に起因する問題點を明らかにし、それを踏まえた上での、阜陽漢簡『蒼頡篇』の検討の手順に就いて記しておきたい。

猶、小論は、<sup>5)</sup> 文物局古文獻研究室、阜陽漢簡整理組「阜陽漢簡《蒼頡篇》」(『文物』一九八三年 第二期)に發表された全簡の釋文、簡注、C001(釋文通用統一編號、第一簡)からC044(同、第四十四簡)までの摹本と、管見の及んだ十七の殘簡の寫眞に基づくものである。検討にあたっては、一二五點の殘簡全てを對象とするが、摹本の存しないC045以後は、概ね判讀字數三字以下の斷片であり、十全な資料となり難い。従って、摹本により釋文を追試することも可能なC001からC044の四十四簡を中心資料とし、他はその関連に於て適宜取り上げることとしたい。

## 一 阜陽漢簡『蒼頡篇』検討の手順

簡牘資料は多くの場合、簡を編綴していた紐が朽ち、各簡が分散した状態で出土する。従って、それらをおかして原態(冊書)に復元するかが、簡牘資料の検討に於ける最大の問題となっている譯である。

その際、出土した簡牘資料が既に傳世している文獻である場合は、本文にかなりの異同が豫想されるものの、傳世文獻資料を手摺りにすることにより、復元の可能性が見出される。他方、出土した簡牘資料が傳世していない未知の内容である場合も、簡の保存が完好であり、埋葬時の状態等が保持されていれば、簡の内容や出土状況を精査することによって、復元への道が拓かれることとなる。

しかし、阜陽漢簡『蒼頡篇』の場合は、傳世していない未知の文獻であるにもかかわらず、崩壞や盜掘を経た結果、竹簡が散亂・扭曲した状態で出土し、完全な簡は一簡も見出されない。そのため、原態の完全な復元はほぼ不可能としなければならず、現時點に於て、熒煌・居延漢簡『蒼頡篇』との重出部分から、僅かに C001—C002 と C032—C033—C034 の二例の連接が明らかにされているに過ぎない。

従って、阜陽漢簡『蒼頡篇』の検討に於ては、こうした資料上の障害をいかに克服するかが、重要な課題と言えるのである。

これに關して特に注目されるのは、『蒼頡篇』が、一般の典籍・文書とは異なつた字書的性格を有する點である。私見によれば、『蒼頡篇』は敘述的部分を含みつつ、その中心は文字の羅列形態であつたと豫測される。従って、各殘簡を詳細に分析することにより、全體的な内容や構造を或る程度まで推定することが可能かと思われ、それは同

時に、殘簡相互の連接復元にも一定の有効性を發揮すると考えられる。

ここで、以後の行論の前提として、關連する先行研究に就いて、胡平生・韓自強『蒼頡篇』的初步研究(『文物』一九八三年 第二期)を中心に、概略を示しておきたい。

「『蒼頡篇』的初步研究」は、羅振玉・王國維が熒煌漢簡『蒼頡篇』の検討によつて指摘した、四字一句・二句一韻の特徴に加えて、阜陽漢簡『蒼頡篇』を中心とした検討による用韻に就いての新たな知見として、次の三點を掲げている。

1 毎章一韻到底である。

2 二句一韻の他に、三句一韻、一句一韻という例も見出される。三句一韻に就いては、始皇帝刻石の用韻との關連が窺われ、秦代

『蒼頡篇』の様式と見なし得る。

3 押韻しない句の末字に就いても、韻部の比較的接近した字を用いて、相互に音の和協を求めた例が見出され、「交韻」の如き狀況が窺われる。

更に同論文は、『蒼頡篇』殘簡に認められる押韻字が、之部(職部を包括)・魚部・陽部の三部に集中していることから、それぞれが『蒼頡篇』を形成する「蒼頡」・「爰歷」・「博學」の三篇の押韻に相當し、一篇一韻ではないかとの極めて注目すべき假説を提出している。

この見解に就いては、今後の検討に俟つ旨を記し、慎重に斷定を保留しているが、各簡が押韻の種類によつて三つに分類されるという事實は、『蒼頡篇』の内容・構造を考察していく上で、重要な據り所となるものであらう。「阜陽漢簡『蒼頡篇』」に發表された釋文は、各簡を上記三種の押韻によつて分類し、四字句の形に整理した上で、押韻



ら形成される形態である。以下、同論文によって例示してみよう。<sup>10)</sup>

・**兼天下** 海内并脚<sup>11)</sup> 飭端脩灑 變位<sup>12)</sup> (C002)  
 ・**愛歷次地** 繼續前圖 (C010)

同論文は、C002を功を歌い徳を頌えた内容とし、またC010の部分に就いては、「愛歷篇」の冒頭にあたり、「蒼頡篇」と接續することを説明したものと述べ、更に、一九七〇年代以降の再調査による新獲の居延漢簡から検出された、冒頭の第一章六十字分をほぼ存する『蒼頡篇』殘簡は、典型的な陳述式であつて、章全體の中心主題は「勸學」であると報告している。

Iに該當すると見られる三つの例が、やや特殊な内容を有し、しかも、その内の二例が、篇の首部に存しているという状況は、『蒼頡篇』中に於て陳述式形態は特別な位置を占めていたのではないか、との推測を可能にするものと考えられる。同論文が「總的説來、陳述式的章節和句式似乎不是很多」と指摘する如く、Iと確定し得る例が見出され難い事實は、この推定の一證左となり得るものであろう。

次に、II連文式形態の検討に移りたい。IIは、Iが典型的な敘述形態であるのに對し、二字相互に密接な意義的關連性を有する、所謂、連文を中心として形成されている點に特色が見出される。ここで、IIの特徴を示すC003を取り上げ、各字の關連を圖式化して、若干の解説を加えることとする。

・**軌臯佐有** 懲悼驕褻<sup>13)</sup> 誅罰貨耐<sup>14)</sup> 政勝誤亂<sup>15)</sup> (C003)

行論の便宜上、まず第二句の検討から始めたい。第二句「懲悼驕褻」は、前述した「《蒼頡篇》的初步研究」の句式的分類に於て、羅列式の内、一句四字が全て近義・同義の例として掲げられているものである。しかし、『蒼頡篇』とはほぼ同時代の資料と見なされる睡虎地

秦墓竹簡<sup>16)</sup>「爲吏之道」に、同様の四字句からなる「勞悼安暴」「倨驕毋人」という用例が認められることから、四字が均等な關係を有するのでなく、當時に於ては「懲悼」「驕褻」と意識され、その二組の併置によって、結果的に同義、近義の四字句が形成されたものと推測される。

同様な二字二組の關係は、第三句「誅罰貨耐」に就いても指摘し得る。上部「誅罰」は、罪を責めとがめるといふ共通義を有しており、下部「貨耐」は、『說文解字』に「貨、小罰曰財自贖也」(六下・貝部)、「耐、罪不至髡也」(九下・而部)とあり、共に、輕罪に課せられた小罰であることが知られる。従つて、第三句は、二字連文の二組によって形成され、下部「貨耐」は上部「誅罰」の具體内容に相當すると見なし得るであろう。<sup>17)</sup>

第四句「政勝誤亂」も前述した二句と同様、二字連文の二組と見ることが可能である。下文を缺失するため想像の域を出ないが、下部「誤亂」は上部「政勝」の目的語としての役割を有しているかと思われる。

ともあれ上述の検討から、第二・三・四句には、罪惡とその制裁といった通底する主題が看取され、この三句は、かかる共通主題の下に排列されたものと推定されるのである。

ここで、留保しておいた第一句を分析してみよう。この句も第二句以下と同様、句内の二字に密接な關連が認められる。しかし、上文を缺失するため明確に把握し難いものの、下三句に窺われた如き主題の共通性は、認め得ないようであり、第一句は、或いは別の主題に關わる部分かとも想像される。

以上の検討の結果、II連文式形態は、或る主題の下に、連文を中心

とした二字の連繫によつて敘述する、言わば、陳述式と羅列式との中間的性質を有する形態と見なすことが可能であろう。私見によれば、ここに取り上げた C033 は、Ⅱの中間的な例の一つと見なされ、他に、より陳述式形態に接近した部分や、逆に、連文の羅列的な併置によつて、その部分のみでは内容を把握し難い例も見出される。その詳細に就いては後述するが、いずれも、連文を中心とした二字を基調としてゐる點に於て共通性を有しており、Ⅱに包括し得るものと考えられる。更に、こうした例は、阜陽漢簡『蒼頡篇』に散見されることから、Ⅰに比して、より主要な位置を占める形態であつたと推測される。

續いて、Ⅱ類義字羅列式形態の検討に移りたい。この形態は、「蒼頡篇」的初步研究」の句式の分類の内、羅列式の(1)に該当する句で形成され、同時に、(4)との關連が窺われるものである。Ⅱの場合に比して、後述する形態の性格上、殘簡中に於てもその判定は比較的容易であり、しかも多くの用例が見出される。以下、各殘簡に於てⅡと見なされる部分の内、一句以上を存するものを抽出し、順に掲げてみよう。

- ・巴蜀茶灯 筐篋斂筭 (C004)
- ・瘰癧癰座 疚痛遽款 毒 (C007)
- ・繭絲棠帙 布絮繫絮 (C012)
- ・鼈魚 陷阱釘鈞 管笥習習 (C013)
- ・機杼膝履 衽綜繚纏 (C014)
- ・茶菹落菹 鸕獺颯殼 鸕獺貂狐 蛟龍龜蛇 (C015)
- ・此云主 而乃之於 縱舍擣擊 擻控抵扞 拘取陌 (C021)
- ・孟 槃椽栝几 鏡釘 (C023)

『蒼頡篇』の内容と構造

- ・疵疔禿瘻 齷齪瘻傷 毆伐痕瘖 肤跌 (C026)
- ・邑里 縣鄙封疆 徑路衝□ (C027)
- ・街巷垣牆 開閉門閭 闕 (C028)
- ・室內 窓牖戶房 桴楫棧機 杓和橋梁 (C029)
- ・稜科 封莖稷種 姪娣 (C030)
- ・黠厲黯黠 蹇勳駢駢 驗蹇赫赧 黛赤白黃 (C033—C034)
- ・廡廡 困窮廩倉 秉糶參斗 升半實當 (C035)
- ・氏羌 贅拾鈎鈞 鑄冶鎔鑲 (C036)

以上の諸例によつて、『蒼頡篇』は、多分野に亙る字を種別毎に集中的に排列した、語彙分類體とも言い得る性格を有していたことが明らかとなる。そしてこうした性格は、C004 (竹)・C007 (子)・C012 (糸)・C021 (手)・C028 (門)・C029 (木)・C033—C034 (墨)・C036 (金)等の如く、結果的に同一部首の集中化を生じせしめている。更にⅡの特徴として、概ね名詞を中心に形成されている點が指摘される。即ちⅡには、同種の名詞を集中的に羅列して一種の部類を形成することにより、各字の所屬を提示し、個々の名義を明確化せんとする排列意圖が窺われるのである。

それでは、かくの如く形成される各々の部類には、果して一定の基本的な單位が見出されるであろうか。この問題を考察するために、ここで押韻に着目してみたい。まず、前記の諸例を含む殘簡全體を、押韻字の位置を統一して列記すると、別表のようである。

この表によつて、Ⅲに屬する諸例は、概ね點線で區切つた押韻閉の二句八字を一群としているという、排列上の共通性が指摘されるであろう。以下この點に關して、C015とC033—C034とを取り上げ、分

〔別表〕

<input checked="" type="checkbox"/> 絶	<input checked="" type="checkbox"/> 冢	<input checked="" type="checkbox"/> 帝	<input checked="" type="checkbox"/> 棺	<input checked="" type="checkbox"/> 区	<input checked="" type="checkbox"/> 巴	<input checked="" type="checkbox"/> 蜀	<input checked="" type="checkbox"/> 茶	<input checked="" type="checkbox"/> 灯	<input checked="" type="checkbox"/> 厨	<input checked="" type="checkbox"/> 宰	<input checked="" type="checkbox"/> 物	<input checked="" type="checkbox"/> 象	<input checked="" type="checkbox"/> (C004)
<input type="checkbox"/> 俗	<input checked="" type="checkbox"/> 狼	<input checked="" type="checkbox"/> 鬻	<input checked="" type="checkbox"/> 吉	<input checked="" type="checkbox"/> 忌	<input checked="" type="checkbox"/> 瘵	<input checked="" type="checkbox"/> 痺	<input checked="" type="checkbox"/> 癰	<input checked="" type="checkbox"/> 座	<input checked="" type="checkbox"/> 毒	<input checked="" type="checkbox"/> (C007)	<input checked="" type="checkbox"/> 雙	<input checked="" type="checkbox"/> 輪	<input checked="" type="checkbox"/> (C012)
<input checked="" type="checkbox"/> 龍	<input checked="" type="checkbox"/> 魚	<input checked="" type="checkbox"/> 陷	<input checked="" type="checkbox"/> 阱	<input checked="" type="checkbox"/> 釘	<input checked="" type="checkbox"/> 繭	<input checked="" type="checkbox"/> 絲	<input checked="" type="checkbox"/> 桌	<input checked="" type="checkbox"/> 帙	<input checked="" type="checkbox"/> 管	<input checked="" type="checkbox"/> 笥	<input checked="" type="checkbox"/> 罌	<input checked="" type="checkbox"/> 置	<input checked="" type="checkbox"/> (C013)
<input checked="" type="checkbox"/> 茶	<input checked="" type="checkbox"/> 堇	<input checked="" type="checkbox"/> 菹	<input checked="" type="checkbox"/> 菹	<input checked="" type="checkbox"/> 菹	<input checked="" type="checkbox"/> 機	<input checked="" type="checkbox"/> 杼	<input checked="" type="checkbox"/> 膝	<input checked="" type="checkbox"/> 複	<input checked="" type="checkbox"/> 紆	<input checked="" type="checkbox"/> 綜	<input checked="" type="checkbox"/> 緣	<input checked="" type="checkbox"/> 繡	<input checked="" type="checkbox"/> (C014)
<input checked="" type="checkbox"/> 此	<input checked="" type="checkbox"/> 云	<input checked="" type="checkbox"/> 主	<input checked="" type="checkbox"/> 而	<input checked="" type="checkbox"/> 乃	<input checked="" type="checkbox"/> 之	<input checked="" type="checkbox"/> 於	<input checked="" type="checkbox"/> 縱	<input checked="" type="checkbox"/> 舍	<input checked="" type="checkbox"/> 擣	<input checked="" type="checkbox"/> 挈	<input checked="" type="checkbox"/> 鏹	<input checked="" type="checkbox"/> 鉤	<input checked="" type="checkbox"/> (C015)
<input checked="" type="checkbox"/> 孟	<input checked="" type="checkbox"/> 疾	<input checked="" type="checkbox"/> 疥	<input checked="" type="checkbox"/> 禿	<input checked="" type="checkbox"/> 癩	<input checked="" type="checkbox"/> 榮	<input checked="" type="checkbox"/> 椛	<input checked="" type="checkbox"/> 几	<input checked="" type="checkbox"/> 鏡	<input checked="" type="checkbox"/> 釘	<input checked="" type="checkbox"/> (C023)	<input checked="" type="checkbox"/> 拘	<input checked="" type="checkbox"/> 取	<input checked="" type="checkbox"/> (C021)
<input checked="" type="checkbox"/> 街	<input checked="" type="checkbox"/> 巷	<input checked="" type="checkbox"/> 垣	<input checked="" type="checkbox"/> 牆	<input checked="" type="checkbox"/> 開	<input checked="" type="checkbox"/> 閉	<input checked="" type="checkbox"/> 門	<input checked="" type="checkbox"/> 閭	<input checked="" type="checkbox"/> 縣	<input checked="" type="checkbox"/> 鄙	<input checked="" type="checkbox"/> 封	<input checked="" type="checkbox"/> 疆	<input checked="" type="checkbox"/> 徑	<input checked="" type="checkbox"/> (C027)
<input checked="" type="checkbox"/> 載	<input checked="" type="checkbox"/> 章	<input checked="" type="checkbox"/> 室	<input checked="" type="checkbox"/> 內	<input checked="" type="checkbox"/> 窻	<input checked="" type="checkbox"/> 牖	<input checked="" type="checkbox"/> 戶	<input checked="" type="checkbox"/> 房	<input checked="" type="checkbox"/> 姪	<input checked="" type="checkbox"/> 姊	<input checked="" type="checkbox"/> (C030)	<input checked="" type="checkbox"/> 桴	<input checked="" type="checkbox"/> 桴	<input checked="" type="checkbox"/> (C028)
<input checked="" type="checkbox"/> 氏	<input checked="" type="checkbox"/> 羌	<input checked="" type="checkbox"/> 黠	<input checked="" type="checkbox"/> 臘	<input checked="" type="checkbox"/> 黯	<input checked="" type="checkbox"/> 黠	<input checked="" type="checkbox"/> 黠	<input checked="" type="checkbox"/> 黠	<input checked="" type="checkbox"/> 驗	<input checked="" type="checkbox"/> 驗	<input checked="" type="checkbox"/> (C033)	<input checked="" type="checkbox"/> 乘	<input checked="" type="checkbox"/> 輿	<input checked="" type="checkbox"/> (C036)
<input checked="" type="checkbox"/> 贊	<input checked="" type="checkbox"/> 拾	<input checked="" type="checkbox"/> 鈎	<input checked="" type="checkbox"/> 銚	<input checked="" type="checkbox"/> 鑄	<input checked="" type="checkbox"/> 冶	<input checked="" type="checkbox"/> 鎔	<input checked="" type="checkbox"/> 鑲	<input checked="" type="checkbox"/> 頂	<input checked="" type="checkbox"/> 頂	<input checked="" type="checkbox"/> (C036)	<input checked="" type="checkbox"/> 乘	<input checked="" type="checkbox"/> 輿	<input checked="" type="checkbox"/> (C036)
<input checked="" type="checkbox"/> 瘵	<input checked="" type="checkbox"/> 痺	<input checked="" type="checkbox"/> 癰	<input checked="" type="checkbox"/> 座	<input checked="" type="checkbox"/> 痰	<input checked="" type="checkbox"/> 痛	<input checked="" type="checkbox"/> 迷	<input checked="" type="checkbox"/> 欸	<input checked="" type="checkbox"/> 疥	<input checked="" type="checkbox"/> 疥	<input checked="" type="checkbox"/> (C025)	<input checked="" type="checkbox"/> 疥	<input checked="" type="checkbox"/> 疥	<input checked="" type="checkbox"/> (C025)
<input checked="" type="checkbox"/> 鏡	<input checked="" type="checkbox"/> 釘	<input checked="" type="checkbox"/> (C023)	<input checked="" type="checkbox"/> (C021)	<input checked="" type="checkbox"/> (C015)	<input checked="" type="checkbox"/> (C012)	<input checked="" type="checkbox"/> (C013)	<input checked="" type="checkbox"/> (C014)	<input checked="" type="checkbox"/> (C027)	<input checked="" type="checkbox"/> (C025)	<input checked="" type="checkbox"/> (C025)	<input checked="" type="checkbox"/> (C025)	<input checked="" type="checkbox"/> (C025)	<input checked="" type="checkbox"/> (C025)
<input checked="" type="checkbox"/> (C028)	<input checked="" type="checkbox"/> (C028)	<input checked="" type="checkbox"/> (C028)	<input checked="" type="checkbox"/> (C028)	<input checked="" type="checkbox"/> (C028)	<input checked="" type="checkbox"/> (C028)	<input checked="" type="checkbox"/> (C028)	<input checked="" type="checkbox"/> (C028)	<input checked="" type="checkbox"/> (C028)	<input checked="" type="checkbox"/> (C028)	<input checked="" type="checkbox"/> (C028)	<input checked="" type="checkbox"/> (C028)	<input checked="" type="checkbox"/> (C028)	<input checked="" type="checkbox"/> (C028)
<input checked="" type="checkbox"/> (C029)	<input checked="" type="checkbox"/> (C029)	<input checked="" type="checkbox"/> (C029)	<input checked="" type="checkbox"/> (C029)	<input checked="" type="checkbox"/> (C029)	<input checked="" type="checkbox"/> (C029)	<input checked="" type="checkbox"/> (C029)	<input checked="" type="checkbox"/> (C029)	<input checked="" type="checkbox"/> (C029)	<input checked="" type="checkbox"/> (C029)	<input checked="" type="checkbox"/> (C029)	<input checked="" type="checkbox"/> (C029)	<input checked="" type="checkbox"/> (C029)	<input checked="" type="checkbox"/> (C029)

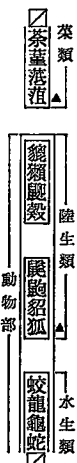
析を試みるごととする。猶、以下の用例に就いては、別表を参照されたい。  
 まずC015を分析してみると、第一句は上句を缺失するが、全て菜

に關わる名詞の集合と見なされ、第二句以下とは別類であることが明らかである。第一句の末字「菹」には押韻が認められ、先の假説を裏付けることから、問題は第二句から第四句に限定される。

(C033—C034 下文は二三三頁の釋文参照)

第二句以下は、その全てを動物名として總括することが可能である。しかし、個々の字義を精査すると、第二句・第三句「魏類鼯鼠 鼯鼠貂狐」は、陸棲動物（毛物名であるのに對し、第四句「蛟龍龜蛇」（下文缺失）は、水棲動物名として把握され、その性質を異にしていることが判明する。こうした排列上の區分は、生態に關わる分類意圖を反映したものと解され、第二句・第三句を一群と見なすことが可能となる。

以上述べた所を要約的に圖示すれば、次のようである。



次に、C033—C034の分析に移りたい。これは、煥燼漢簡によつて連接が確定されたものであり、（ ）はそれによる補充部分である。

「『蒼頡篇』的初步研究」は、先に示した句式の分類に於て、この部分を羅列式の(4)の例に取り上げ、「羅列了十六種顔色、其中與黑色有關的就有十一種」と述べ、黑色を中心とする色彩名として一括してらえている。

ここでこの部分を、先の假説に従い二句八字に分割して示してみよう。

黠廉黯黠 (黠黠黠) 黠  
 驗黠赫赧 黛赤白黃

兩者を對比すると、前半二句は全て黒偏の字で占められるのに對し、後半二句は他に赤・白・黄といった異種の色彩名が含まれる點に、排列上の相違が認められる。一方、別の見解に立てば、黒偏の字を集中して排列する意圖を有し、第三句の冒頭二字「驗黠」は、前半二句に収まらなかつた爲に、そこに配字されたとの推定も可能である。

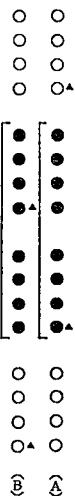
『蒼頡篇』の内容と構造

う。しかしその場合、「黛」が「赫赧」の後に配置されている點に就いての説明が困難となり、この推定は成立し難い。

後半二句の色彩名の排列が、いかなる意圖によるかは明確にし得ないが、前半二句には、黒に關する字で統一せんとする意圖を窺うことが可能であろう。従つて、C033—C034も、猶把握し難い部分を有するものの、先の假説の反證とは見なされず、C015の第一・三句と第四句との關係と同様、色彩という共通主題の下に、二句八字を一群とし、何らかの低位分類を試みた排列形態であろうと推測し得るのである。

これまでの論述により、Ⅱには二句八字で一群を形成する排列意圖が認められ、一見、二句以上に及ぶと思われる例も、部類を共通にする展開上の現象であつて、詳細に分析することにより、同様に二句一群の共通性の内に包括し得ることを明らかにした。かかる共通性は、別表に示したⅢの諸例の全てに適用され、現時點に於て、假説を覆す積極的な反例は見出されないようである。

ここで特に注目すべきは、既述した如く、一群を形成する二句八字の末尾字が、全て押韻箇所一致しており(A)、押韻字が、一群の中位に位置する例(B)は見出されない點である。



二句一韻の例外として、一句一韻、三句一韻の例が見られるという指摘は既に紹介したが、これらはいずれも陳述式形態との間に、密接な關係が豫想されるものであり、Ⅲは、全て二句一韻の形式と見なし得る。『蒼頡篇』に認められる押韻に就いては、從來、主として詠習との關連からの指摘がなされてきている。これまでの検討によつて

明らかとなった、一群を形成する二句八字の末尾字が例外なく押韻箇所一致するという状況は、押韻が誦習上の利便のみではなく、同時に、意義的なまとまりを示す機能をも有していたことを暗示するものと考えられる。

Ⅲの検討の總括として、前記の諸例の分析によって歸納し得た共通性を纏めておきたい。

- (1) 類義字羅列式形態は、概ね名詞を中心として形成される。
- (2) 部類、或いはその内部に於ける下位分類により、二句八字で一群が形成される。
- (3) 一群の末字は、押韻箇所一致する。

以上本章では、阜陽漢簡『蒼頡篇』に見出される文字排列を、三形態に分けて検討を加えた。その結果、『蒼頡篇』はⅡ・Ⅲが中心的位置を占めていたと推測され、特にⅢは、『蒼頡篇』の分類體字書としての性格を物語る形態であることを明らかにし得たと考える。

ところで、阜陽漢簡『蒼頡篇』を資料として、『蒼頡篇』の内容・構造を解明せんとする際、その大部分が小片の斷簡であることが大きな障害となっており、殘簡の連接も、熒煌・居延漢簡『蒼頡篇』と阜陽漢簡『蒼頡篇』との重複部分から、僅かに二例が明らかにされたに過ぎないことは、既述したところである。この二例は、言わば外部資料によつたものであるが、逆に、殘簡内部に見出される形態上の共通性に着目することにより、連接を推定し得る可能性も存していると考えられる。本章ではこうした意圖から、阜陽漢簡『蒼頡篇』の連接に就いて、検討を加えることとした。

### 三 連接の復元

阜陽漢簡『蒼頡篇』殘簡の連接の確定は、最終的にはそれを裏付ける同一資料の發現に俟つ他は無く、資料上の制約は、現時點に於て完全なる解決を見ない。しかし、敘述性の希薄な、文字の羅列から成るⅢ類義字羅列式形態を含む殘簡に就いては、前章の分析によって得られた三點の共通性を適用することにより、連接を推定することが可能かと思われる。

こうした意圖に基づき、全ての殘簡に互つて検討を重ねた結果、先の三點を満たすものとして、C015—C013・C027—C028・C058—C055の三例が検出された。以下、それぞれに就いて、個別に考察を加えていきたい。

#### C015—C013

C015の末尾句は「蛟龍龜蛇」であり、既に觸れた如く、水棲動物名に關する羅列式形態の前半部分であるかと推定される。従つて、C015に下接する殘簡に就いては、上部に水棲動物に關する句を有し、その排列は、缺損を想定すれば四字以内で、末字に押韻が認められるもの、という條件を設定し得る。

これらの條件に適する殘簡を検索すると、簡の首部に「鱓魚」とあるC013が見出される。C015を除き、全簡中、水棲動物名に關する文字の排列が見られるものはC013のみであり、しかも、C013・C015は共に魚部押韻であつて、「蒼頡篇」的初步研究」の推定に従えば、兩簡は同一の篇内に存した可能性を有している。

以上の検討の結果、C015とC013との連接は、次の如く復元される。



茶重落祖 總額總毅 騰龍紹派 蛟龍龜蛇 (Co15)

鱈魚 階併釘鈎 管筍翠管 (Co13)

C027—C028

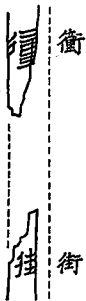
C027の末尾句は「徑路衝□」であり、これは通道に關する羅列式形態の前半部分と推定される。従って、C027に下接する殘簡に就いては、上部に通道に關する句を有し、その排列は、缺損を想定すれば四字以内で、末字に押韻の認められるもの、という條件を設定し得る。

これらの條件に適する殘簡を検索すると、簡の首部に「□街巷垣牆」という句を有するC028が見出される。先の場合と同様、C027以外で通道に關する文字の排列が見られるものは、全簡中C028のみであり、しかも兩簡は共に魚部押韻であつて、同一篇内に存した可能性を有している。

以上の検討の結果、C027とC028との接続は、次の如く復元される。

□街 (820C) 1 (120C) □街巷垣

更に原本によれば、次圖の如く、C027の末字「衝」とC028の首字「街」とは、共通して右側「二」の缺損が認められる。



文字の缺損に認められるこの様な類似性は、兩簡の接合を暗示し、

『蒼頡篇』の内容と構造

先の復元の適合性を裏付けると考えられる。

C058—C035

C035の首部一句「□府廩 困窮陳倉」は、くらに關する羅列式形態と見なされ、先の共通性を適用すれば、缺損する上部「二字」も、くらに關わるものであつたと推定し得る。

原本によれば、「府」の上の殘存部は次圖の如くであり、「寸」を含む字であつたことが知られる。



そこで、くらに關する字で「寸」を含むものを檢すると、『説文解字』(九下・广部)に「文書臧也」とある「府」が擬せられる。

C035による推定は以上であるが、この推定に呼應するものとして、次に引用するC058の釋文と、それに付された按語が注目される。

C058 庫府

按、《居延漢簡》282・1、□堂庫府。 据此則「庫」下一字爲「府」。

即ち、居延漢簡『蒼頡篇』に見出される「□堂庫府」と記した簡(二八二・一)により、C058の「庫」の下の殘缺字は「府」に比定される、と言ひものである。従つてC058は、先にC035によつて推定した連接簡の條件を、全て満たしていることとなる。

「府」に於ける、C058末部「」とC035首部「付」との缺損部の合致は、この兩簡が元來接合していたことを如實に物語るものであらう。

以上の見解は、音韻學の見地から、更に別の有力な證左を付け加え

ることが出来る。居延漢簡『蒼頡篇』に見出される「□堂庫府」は、これまでの検討結果により、

□堂▲ 庫府廡廡 困窮廡倉……

という排列上に位置していたと推定される。従って、上述の復元が正しければ、▲で示した如く「堂」が押韻し、しかも下第二句の末字「倉」と同じ陽部韻であることになる。そして、「堂」は正に陽部押韻字であり、連接の適合性が立證されるのである。

また、それは同時に、僅か三字を存するのみで、これまでどの様な部分に位置していたのか全く不明であった居延漢簡『蒼頡篇』(二八二・一)に就いても、新たな知見を加える結果となった譯である。

これまでの検討によつて復元すれば、C058とC035とは、次の如く接合していたこととなる。猶、括弧内は、居延漢簡(二八二・一)により補う。

(C058) → (C035)

□(衍堂) 庫府廡廡 困窮廡倉 ▲ 乘難參斗 升牛實堂 ▲ 國國 □

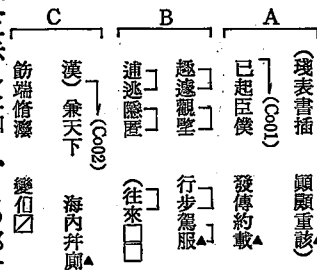
以上、Ⅲ類義字羅列式形態と見なされる諸例を分析し、その結果歸納し得た三點の共通性を適用することによつて、新たに三例の連接簡の復元を試みた。用例から歸納された殘簡内部の共通性に基づく復元が、押韻字の部の一致、文字の缺損の類似、文字の殘缺部分の合致といった外的諸要因をも同時に満たすという現象は、歸納結果の妥當性と復元の適合性とを物語るものと言えるであらう。

#### 四 各形態の連繫と展開

先の第二章に於ける検討は、「『蒼頡篇』的初步研究」の分類を踏まえて、各殘簡の字義と文字排列との間に何らかの共通性が認められな

いか、との意圖によるものであった。本章ではそれを受けて、燉煌・居延漢簡『蒼頡篇』との關連から連接が明らかにされている C001—C002・C032—C033—C034 の二例に、前章に於て連接を推定した C015—C013・C027—C028・C058—C035 の三例を加えた五例を中心に更に擴大した觀點から、I・II・IIIの各形態が、どのように連繫し展開しているかを分析していくこととする。それは同時に、『蒼頡篇』の全體像を究明するための、一助となり得るものであらうと考えられる。

それでは、居延漢簡『蒼頡篇』によつて連接が明らかにされている C001—C002 の検討から始めたい。まず、記號等を付した上で釋文を示してみる。括弧内は、居延漢簡(九・一A、九・一C)により補つたものである。



釋文に示した如く、この部分は、A・B・Cの三つに區分することが可能かと思われる。

まずAは、後字が前字の補語にあたりと見なされる「發傳」や、「已起臣僕」の如く、「臣僕」が「起」の目的語と推測される例などが見られ、全體的に敘述性が窺われる。しかし他方「環(箋)表」「順

類「臣僕」等の如く、類義字の併列関係にあるものが見出され、Iの例とは若干様相を異にしていることから、IIに包括し得る例であろうと考えられる。

次にBは、釋文中に「示した如く、全體が連文によって形成されていると見なされる。『耆頌篇』的初步研究」は、Bの「趣遠觀望」を句式の分類の(2)に例示し「一句を二組に分け、各組の字義は関連せず、組内の二字は同義・近義の字が併列される」と説明している。確かに、一句四字の觀點からすれば、こうした説明が可能であるが、Bを全體的に検討するならば、むしろ、これらの連文は全て行動・行為に關わる動詞の組成である點が注目されよう。

また、「行歩駕服」の句に於ては、「行歩」があゆみ、「駕服」が車馬に關する字であり、この兩者には、移動という意義の關連性が認められ、次句の「逋逃隱匿」では、「逋逃」がにげる、「隱匿」がかくれるという字義を紐帶としており、兩者には、或る對象を回避するという行動上の共通性が指摘される。

こうした分析を踏まえるならば、一句内で意義的關連が見られないとされる「趣遠」と「觀望」も、他の句との關連に於て、何らかの役割を擔っていると推測されるであろう。従つて、Bは、連文によって或る狀況を敘述したものと見なすことが可能であり、IIに包括し得ると考えられる。

A・Bに對してCは、既述した如く典型的な敘述體を成し、Iに屬するものである。また、その語法には、始皇帝期の泰山刻石等に見られる銘文と密接な關係が窺われる。

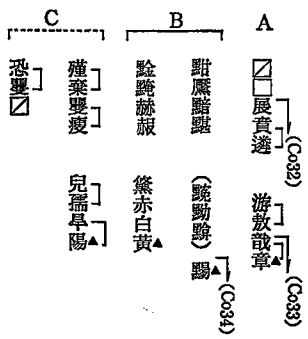
それでは、A・B・Cの各部分は、相互にいかなる關連を有しているであろうか。

『耆頌篇』の内容と構造

このような韻文形式の場合、特に斷簡であることから前後との關連が不明であり、解釋を一定し難い部分の生じることを豫め斷っておかなければならないが、上述した検討結果を踏まえるならば、以下の如き推測が可能であろう。即ち、Aは文書發布の狀況、Bはそれに伴う行動・行為、そしてCは、文書の内容に相當するかと思われる天下併合の頌辭、という關連が想定されるのである、この推測が大筋に於て承認されるならば、A・B・Cは、天下併合に關わる主題の下に排列されたものと見なし得るであろう。

また、A・B・Cに見られる押韻箇所は、言わば句點が付されるべき位置に相當し、先にIIに於て指摘した押韻の機能は、I・IIにも共通して認め得ることが知られる。

次にC032—C033—C034の検討に移りたい。まず、前と同様に釋文を示してみる。括弧内は、『流沙墜簡』により補ったものである。



AとCの部分は「示した如く、二字相互に意義の共通性を認めることが可能であり、共にIIの形態と見なされる。これに對してBは、既述した如くIIの形態であり、色彩名の部類を形成している。

A・Cに關しては、上文或いは下文を缺くため、その内容を正確に

把握し難いが、恐らく先の場合と同様、何らかの主題の下に排列されたものと推測される。

A・B・C相互の関連に就いても、AとCの缺損により十分に明らかにし得ない。かかる不確定要素の多い状況下では憶測の域を出ないが、殘存部から推測するならば、顯著な関連性は窺い難いようであり、或いは、『蒼頡篇』の文字排列に於て、ある主題が別の主題へと常に連續的に切れ目なく展開する譯ではなく、段落の如き區切れが存していたことを暗示する例とも見なし得るであらう。

これまでに取り上げた二例は、I・II、或いはII・IIIといった、異なる形態を含むと推定される部分であった。この内、IとIIに就いては、相互に關連しつつ展開していると推測し得る例が見出された譯であるが、IとIIIまたはIIとIIIに就いては、意義の關連を有して連繫している明確な例は見出し難いようである。

既述した如く、I及びIIに就いては、その正確な認定が斷片的な殘簡からは非常に困難であるという、用例抽出上の差異が、一つの大きな原因となつてゐる譯であるが、他方、IIIは後に檢討する如く、同一形態の連繫が主流を占めてゐるようであり、IやIIとの關連は、その形態上の相違からも比較的希薄だった、との推測も成立し得るかと思われる。

それでは續いて、前章に於て復元した三例を中心に、IIIの各部分ごとのように連繫し、展開してゐるかに就いて考察を加えることとする。

まず、COL5—COL3の分析から始めたい。この部分は全てIIIの形態と見なされ、次の如く區分することが可能かと思われる。

Aは、菜に關わる文字の羅列式形態と見られ、恐らく缺失する上句

A □ 茶薑落菹<sup>1</sup>(COL5)

B 鰻鱺鱖 鵠鰻鰩<sup>1</sup>

C 蛟龍龜蛇 □ 鰻魚<sup>1</sup>(COL3)

D 陷阱鈞 管筍罽<sup>1</sup>□

にも、同類の字が存したであろうと推測される。AとBとの關係に就いては、Aの上句を缺失するため、明確に把握し難い。BとCとは、既述した如く、動物名という觀點からは統括され得るものであり、生態の相違に關わる排列上の區分が看取される。Dは、いずれも獸魚の捕獲に關する文字で形成されるが、ここで注目すべきは、それらを材料或いは用途別に下位分類せんとする排列意圖が、明確に認められる點である。

この點に關して、以下、『說文解字』を中心資料として各字義を簡條的に掲げ、考察を加えることとする。

陷、高下也、……一曰陟也(十四下・冑部)

阱、陷也(五下・井部)

「陷阱」は、おとす・おとし・いれるという共通する字義を紐帶とした連文であり、この場合は下文との關連から、おとし・あなを意味することが明らかである。

鈞 「阜陽漢簡《蒼頡篇》」簡注(1)「鈞、前一字疑爲『鈞』」。

鈞、鈞魚也(十四上・金部)

鈞、鈞魚也(十四上・金部)

「鈞」は、簡注(1)の推定に従うならば、刺す行爲による捕獲を意味

すると解釋される。この字を「鉄」に擬する點に就いては、幕本の字形と比較して、猶疑問の餘地があるが、いずれにしても、下字の「釣」と同様、金屬製の捕獲具、或いはそれによる捕獲行爲を表すものである點は、疑いの無い所であらう。

管 『説文解字』不見。「阜陽漢簡《蒼頡篇》」簡注(1)「管、通管、魚網」

筍、曲竹捕魚筍也(三上・句部)

「管」に引用した簡注(1)は、『説文解字』七下・网部「管、魚网也」に據つたものと解される。しかし、下文に、魚網を表すと見なされる「管」が存し、更に、前後の排列に認められる二字相互の緊密な關連性を考え合せらるならば、「管」を單純に「管」の通用字と解することは危険であり、むしろ「筍」と同様に、竹製の捕獲具を意味するものと見なすべきであらう。

管、覆也(七下・网部)。「阜陽漢簡《蒼頡篇》」簡注(1)「管、《廣韻》、魚網」

管、免网也(七下・网部)

この二字は、共に捕獲用のあみを表すことが知られる。「管」は、『爾雅』釋器にも「免管謂之管」とあるが、『呂氏春秋』卷二十六・上農「網網宜學不敢出於門」の高誘の注「管、獸管也」に従えば、「管」の魚網に對して、廣くけものあみを表すものとも解されよう。

かくの如く、Dには二字相互に緊密な關連が見出される譯であるが、それは、「陷阱」(阜)・「釣釣」(金)・「管筍」(竹)・「管管」(网)という二字の部首の共通性に、如實に窺われる。私見によれば、かかる二字連繫の排列意圖は、概ねⅡの全例に通底しており、同様な指摘を試みたⅡと共に、『蒼頡篇』の基調を形成していると豫測し得るよ

うである。

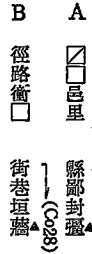
これまでのDの分析によつて、その排列は、捕獲の對象ではなく、材料・用途といった觀點から分類されたものであることを明らかにし得たと思われる。従つてDは、B・Cに認められる分類排列を受けたものではなく、次圖の如く、B・Cの總體との關連により配置され、獨自の基準によつて排列されたものと考えられるのである。

菜類 陸生動物類 水生動物類 捕獲類



(動物部)

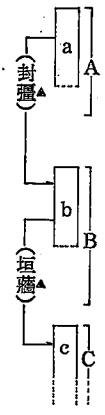
續いて、C027-C028の検討に移りたい。前と同様、この部分もⅢによる組成と見なされ、次の如く區分し得る。



ここで注目されるのは、Aの末尾二字「封疆」とBの末尾二字「垣牆」とが、それぞれの上と性質を若干異にする點である。かかる狀況は、逆に言えば、これらの二字が各書類に於て、何らかの特別な機能を有しているのではないかと、この豫測を可能にするであらう。

『戰國策』卷三十一・燕策に「國之有封疆、猶家之有垣牆」とある如く、「封疆」と「垣牆」には、土地或いは家屋の境界に關わる語である點に、密接な共通性が看取される。こうした觀點から、A・B・Cを分析すると、次圖の如く、「封疆」には、行政區分とでも言い得るa部分と、土地の區分に關わる通道の名稱から成るb部分とに共通する性質が認められ、同様に「垣牆」にも、通道と家屋とを隔て、c

部分の門へと関連していく連繋機能が窺われる。



最後に、C058—C035に就いて検討を加える。この部分は、次の如く区分される。括弧内は、居延漢簡(二八二・一)によって補ったものである。

- A (C058—C035) □ (伯堂)
- B 庫府廩廩 困窮廩倉
- C 乘糶參斗 升半實當

Aは「堂」一字を完存するのみで詳細は不明であるが、或いは、室宅に關わるC029と何らかの関連を有するものであろうか。また、C035の末尾二字は、釋文に示した如く、缺損して判讀し難い。摹本に示された残存部分から推定して「散聚」かとも思われるが、あくまで憶測の域を出ず、検討の対象からは除外しておきたい。Bは既述した如く、くらの名稱によるⅢの形態を示している。Cも、穀物の計量に關わる文字の一群と見なされ、Ⅲの傾向が窺われる。

これまで、Ⅲと見なされる諸例は無作為に羅列されたものではなく、部類内に於ける分類や前後との関連といった周到な意圖に基づいたものであることを、具體的に指摘してきた譯であるが、同様な排列意圖は、C058—C035にも顯著に見出される。

まず、Bの個々の字義を、『說文解字』によって順に掲出してみよう。

- 庫、兵車藏也(九下・广部)
- 府、文書藏也(九下・广部)
- 廩、芻藁之藏也(九下・广部)
- 廩、馬舍也(九下・广部)
- 困、廩之圯者(六下・口部)
- 窮、窘也(七下・穴部)
- 廩、穀所振入也(五下・同部)
- 倉、穀藏也(五下・倉部)

これらによって、Bにも「庫府」「廩廩」「困窮」「廩倉」という、先に指摘した二字單位の緊密な連繋を看取し得ることが知られる。更に注目される點は、次圖に示した如く、穀物に關わる「廩倉」がBの末部に配置されることにより穀物の計量に關わるCの「乘糶」との間に、密接な関連を生じせしめる結果となっている點である。言い換えるならば、Bの末部「廩倉」とCの首部「乘糶」は、BからCへと展開する連繋機能を擔っていると思なされるのである。そして同様な機能は、Aの「伯堂」とBの「庫府」に於ても指摘し得る可能性を有している。



以上、本章に於ては、前章までの検討を踏まえて、阜陽漢簡『倉頡篇』に見出される各形態が、同一形態、或いは他の形態と相互に連繋し展開していく様相を具體的に分析した。その結果、各形態は、連想法的な関連によって相互に連繋・展開しており、その背後には、綿密な排列意圖が存していることが明らかとなった譯である。

## 結語

小論では、阜陽漢簡『蒼頡篇』に見出される文字排列を三形態に分けて検討し、それによって歸納し得た共通性を適用することにより、新たに三例の連接を推定した。更に、熾燠・居延漢簡『蒼頡篇』により既に連接が明らかにされている二例に、先の三例を加えた五例を中心として、擴大した觀點からの分析を試みた。

こうした手順によって明らかにし得た所を、以下箇條的に掲げ、小論の總括としたい。

1 阜陽漢簡『蒼頡篇』には、既述した如きⅠ・Ⅱ・Ⅲの三つの形態が見出される。この内Ⅱは、ⅠとⅢとの中間的性質を有する形態として位置付けられ、『蒼頡篇』は、羅列的なものから敘述的なものに至る、多様な形態によって形成されていたと推定される。

2 Ⅰは用例が多く見出されず、また、篇の冒頭等に位置していることから、『蒼頡篇』中に於て、やや特殊な位置を占め、Ⅱ・Ⅲが中心的な形態であったと推定される。Ⅱは、或る主題の下に、相互に共通性を有する二字の組成を中心として敘述され、これに對してⅢは、多分野に互る事物の名詞を中心とし、それらを類別する點に特徴が認められる。こうした状況から推察するならば、Ⅱは、或る主題を設定することにより、動詞・形容詞といった、所謂、用言の用例を中心に示したものであり、Ⅲは、體言を中心として同種の部類を形成することにより、それぞれの屬類を明示したものと考えられる。

3 Ⅲに認められる部類には、二句八字を單位とする排列意圖が窺

われる。また、その末尾字は押韻箇所と一致しており、押韻と排列の意義上の區切れとが、密接に關連していることが知られる。こうした状況は、Ⅰ・Ⅱに於ても指摘される。

4 Ⅲに見出される部類は、その前に配置された部類、或いは前接する句の末部との連想的關連によって、連繫・展開していると思なされる。同様な連想的方法は、Ⅱの相互の連繫、及び、ⅡとⅠとの連繫に於ても認められるようである。

阜陽漢簡『蒼頡篇』の内容・構造に關する上述の如き性質は、重複字を排除しつつ、簡潔にして誦習に便であるという、學字書としての『蒼頡篇』の一面を如實に物語るものと解される。しかしながら他方に於て、多分野に互る事物の分類體部分や、重層的な連文構造による訓詁的機能を反映した文字排列が認められ、『蒼頡篇』は、後代の訓詁字書等に通底する、字書としての多様な萌芽的要素を内在したものと見なされるのである。

従來、資料上の制約から具體的な検討が十分になされないまま、句式・押韻といった識字課本としての形式のみが強調され、『蒼頡篇』の性格が、一面的に把握される傾向があった。しかし今後は、小論に於て具體的に指摘した如く、學字書を含む後代の字書に展開していく種々の要素を包含する點に、『蒼頡篇』の新たな意義が見出されるべきであらう。

『漢書』藝文志、『說文解字』敍に記された、西漢に於ける古文學家を中心とする『蒼頡篇』重視の状況は、こうした『蒼頡篇』の多面的性格を考慮することによって、整合的な理解が可能となると思われ、『說文解字』以前の字書史に於ける『蒼頡篇』の位置も、上述した觀點から、改めて検討される必要があると考えられる。

(1) 阜陽漢簡『蒼頡篇』殘簡一二五點の内、一點は識別の困難な碎片であるため、實質の對象となるのは一二四點である。

(2) 文物局古文獻研究室 安徽省阜陽地區博物館 阜陽漢簡整理組 「阜陽漢簡簡介」、胡平生・韓自強

「蒼頡篇」的初步研究」(『文物』一九八三年 第二期)

(3) 拙稿「蒼頡篇研究序說」(『言文』三十六號 福島大學教育學部國語學

國文學會 一九八八年)

(4) 阜陽漢簡『蒼頡篇』の検討にあたり、基礎資料として『阜陽漢簡(蒼頡篇)總索引稿』(私家版 一九八六年)を作成した。

(5) 現時點までに確認し得た寫真圖版の所載文獻及び内譯は、次の通りである。

文獻番號 殘簡編號	1	2	3	4
C001			○	
C002			○	
C003			○	
C004			○	
C005			○	
C006			○	
C007	○	○	○	○
C008	○		○	
C009			○	
C010			○	
C011			○	
C012			○	
C026	○			○
C034	○		○	
C037		○	○	
C053		○	○	
C054		○	○	

1 安徽省文物工作隊・阜陽地區博物館・阜陽縣文化局「阜陽雙古堆西漢汝陰侯墓發掘簡報」(『文物』一九七八年 第八期) 圖版貳

2 胡繼高「銀雀山和馬王堆出土竹簡脫水試驗報告」(『文物』一九七九年 第四期) 圖四・圖五

3 文物局古文獻研究室阜陽漢簡整理組「阜陽漢簡『蒼頡篇』」(『文物』一九

八三年 第二期) 圖一・圖版參

4 中國美術全集編輯委員會編『中國美術全集 書法篆刻編1商周至秦漢書法』(人民美術出版社 一九八七年) 三九 阜陽漢簡

(6) 具體例としては、阜陽漢簡『蒼頡篇』と同時に出土した、阜陽漢簡『詩經』が挙げられる。その復元に就いては、胡平生・韓自強「阜陽漢簡詩經研究」(上海古籍出版社 一九八八年) 參照。

(7) 具體例としては、睡虎地秦墓竹簡から検出された、『編年記』『語書』『秦律十八種』等の一連の文獻が挙げられる。その復元に就いては、『雲夢睡虎地秦墓』編寫組「雲夢睡虎地秦墓」(文物出版社 一九八一年) 參照。

(8) 發掘時の竹簡の狀況、及び、困難を極めた整理の模様について文物局古陽地區博物館阜陽漢簡整理組「阜陽漢簡簡介」(『文物』一九八三年 第二期) は、「此墓已塌、且經盜擾、原來存放簡牘的漆筒已朽壞、簡牘不僅散亂扭曲、變黑變朽、而且纖維質逐漸溶解粘連、成爲類似鈎花板那樣的朽木塊。簡片已薄如紙張、互相疊壓鑲嵌、給剝離揭取工作帶來難以想象的困難。經文物局文保所胡繼高等同志近一年時間的精心揭剝、這批簡牘總得以重見天日。」と傳えている。

(9) 圖中の用例は「『蒼頡篇』的初步研究」に示されたものを掲げ、釋文通用統一編號を付して、その所在を明らかにした。また、〇 〇 等の付號も、理解の便を配慮して引用者が加えた。

(10) 以下、簡牘資料の引用にあたっては、不明の文字を□で、字數不明のものを□で示した。また、殘存部分や前後の關連等から推定し得る字は、□の中に記して示した。

(11) 睡虎地秦墓竹簡の引用は、睡虎地秦墓竹簡整理小組編「睡虎地秦墓竹簡」(文物出版社 一九七八年) による。

(12) 以下、『說文解字』の引用は、段玉裁『說文解字注』の本文による。猶、引用にあたって、丁福保『說文解字詁林』、白川靜『說文新義』等



を参考にした。

(13) 「貴」「耐」は、睡虎地秦墓出土の秦律の中に散見され、当時の施行の實際を窺うことができる。

(14) やや時代が降るが、『淮南子』巻五・時則訓に見られる「孟秋之月、……求不孝不悌戮暴傲悍而罰之」の一條は、この解釋に對する證左と見なし得るであらう。

(15) 檄煌漢簡『蒼頡篇』の引用は、羅振玉・王國維『流沙墜簡』(上虞羅氏宸翰樓景石印本 一九一四年)所收「小學術數方技書考釋」小學類に49。

(16) 後掲注(20)参照。

(17) C027・C028は、釋文通用統一編號が連續しているが、この兩簡の連接に就いては未だ言及されていない。

(18) 以下、居延漢簡『蒼頡篇』の引用は、中國社會科學院考古研究所編『居延漢簡甲之編』上・下冊(中華書局 一九八〇年)による。括弧内の漢數字は、ペルイマンの整理番號を示す。

(19) 居延漢簡『蒼頡篇』による補充箇所には、『蒼頡篇』的初步研究に示された校正に従い、『居延漢簡甲之編』下冊・肆・釋文九・一Aの内「戲」を「殘(殘)」と「願」を「願」に改めた。

(20) こうした見解が了承されるならば、既述したC033—C034の色彩名の一辭に就いても、第三句の首部に見られる「驗曉」は、第一・二句と第三・四句との連繫を意圖して配置されたものと解し得るであらう。

付記 小論に於ける文獻名・引用等の表記に就いては、便宜上、簡體字を全て繁體字に改めた。

本稿入稿後に出版された阿辻哲次『圖說 漢字の歴史』(大修館書店 一九八九年、一〇三頁 圖6—17)には、C001—C006、C010—C014の計十一簡の寫真が収録されている。この内、C001—C006、C010—C012の九

『蒼頡篇』の内容と構造

簡までは、注(5)文獻番號の圖版參と同一のものと思われるが、C013・C014の二簡は圖版參には見られないものである。